

平貞文の文芸活動について

——その歌の特質を中心に——

金沢 朱美

はじめに

古今集時代の歌人平貞文は、藤原時平との軋轢により、政治的に不遇であった。また、時平を憚る紀貫之の思惑や、その歌観の違いから、歌界においても思われなかった。更に、後世の説話文学史上においては、滑稽譚の主人公とされ、近、現代に至るまで、歌人としての業績の面が閑却視されている。

本稿では、そのような平貞文の歌人としての面に焦点を当て、その和歌の特質について考察する。

—

萩谷朴氏は、貞文の歌の特質を探るための方法として用語の調査をされ、形容詞、形容動詞、動詞いずれも悲観的な語が多い事を指摘して、喜びの情をあらはしたものは殆んどなく、追慕、悲嘆、失望の意を表したものがばかりである。(中略)

平中の歌は、その心情を表現する語句として用いられたものは悉く悲嘆の文字ばかりであるといつても過言ではない。この事は事物を叙する名詞についてもいひ得る。(中略)

平中といふ人は、春や夏の陽気なものよりも、秋のしめやかさ冬のすさまじさに、より多くの共感を見出す人であった。
と述べておられる。⁽¹⁾

貞文の歌の一面の特徴は、氏の言われる通りであるが、用語のみからでは、貞文の歌のみが悲観的だとは言えないのではないかと稿者は考える。それに貞文の歌は本当に追慕、悲嘆、失望の意を表した歌ばかりであるか、そこにも疑問がある。

そこで、貞文の歌の特質を探るために、同じく『古今集』の歌人で恋歌が特に多い紀友則と清原深養父の恋歌を比較検討してみる。

恋歌のみをここで取り上げる理由は、その勅撰集入集歌数二十六首中十四首が恋歌であり、『後撰集』では入集歌六首が全て恋歌であるといった具合に、貞文は勅撰集において恋歌が特に評価されているからである。

表I

	『古今集』 入集歌数	恋歌 歌数	『後撰集』 入集歌数	恋歌 歌数
友則	四六	二〇	九	三
深養父	一七	七	五	一
貞文	九	三	六	六

ここで、貞文の歌における主要用語をみる前に、貞文の歌を掲げておきたい。

貞文の『古今集』入集恋歌

六六六 白河のしらすともいはじそこきよみ流れて世世にすまむと思へ

ば (恋三)

六七〇 枕より又しる人もなきこひを涙せきあへずもらしつるかな

(恋三)

八二三 秋風の吹きうらがへすくすのはのうらみても猶うらめしきかな

(恋五)

貞文の『後撰集』入集恋歌

返し

五三一 浅してふ事をゆゆしみ山の井はほりし濁に影は見えぬぞ

(恋二) (紀乳母への返歌)

返し

五五四 君を思ふふかきくらべにつのくにのほり江見にゆく我にやはあらぬ

(恋二) (土左への返歌)

題しらす

六四七 我のみやもえてきえなんよととも思ひもならぬふじのねのこ

(恋二) (紀乳母への贈歌)

と 人をいひわづらひてつかはしける

六五八 何事を今はたのまんちはやぶる神もたすけぬわが身なりけり

(恋二) (おほつ舟への贈歌)

人を思ひかけてつかはしける

六九五 はま千鳥たのむをしれとふみそむるあとうちけつな我をこす浪

(恋二) (おほつ舟への贈歌)

大納言国経朝臣の家に侍りける女に、平定文いとしのびてかたらひ侍りて、ゆくすゑまでちぎり侍りけるころ、この女にはかに贈太政大臣にむかへられてわたり侍りにければふみだにもかよはずかたなくなりければ、かの女の子のいつつばかりなるが、本院のにしのたいにあそびありきけるをよびよせて、ははに見せたてまつれとてかひなにかきつけ侍りける

七一〇 昔せしわがかね事の悲しきは如何ちぎりしなごりなるらん

(恋三) (在原棟梁女への贈歌)

貞文の全歌における主要用語をみると、形容詞、形容動詞は、わびし五回、憂し四回、深し、早し三回、長し、空し、儚し、清し、間遠し及び間遠なり、恋し、しげし、つれなし二回、少なし、なまなまし、多し、近し、わりなし、うらめし、まさし、心づきなし、くやし、荒し、あらはなり、浅し、おろかなり、睦まじ一回。動詞は、見る十四回―見ゆ四回―見す一回、思ふ、頼む十三回、渡る(くかぬ、果つ、各一回をふくむ)十回―渡り会ふ一回、―なき渡る一回、―かり渡る一回、逢ふ十回、侘ぶ、泣く八回、流る七回、散る四回―散らす二回、知る、答ふ、聞く、燃ゆ四回―燃やす一回、眺む、契る、嘆く、絶ゆ四回、恨む三回。名詞は、君十九回、我十八回―我が十六回、思ひ十一回、人十回、花九回、秋心八回、空、袖、名七回、月、夜六回、風、春、露、涙五回、天の川四回―天の川原一回、命、色、逢坂四回、をみなへし、菊、時雨、浦、もみち、胸、山彦、富士の嶺、ことの葉、宿、近江(逢ふ身)、嘆き、世、目、秋風、涙の川三回である。

形容詞、形容動詞は、確かにその多くが悲嘆を表す語ばかりである。名詞や動詞も、山彦、答、空、答ふ、知る、聞くのように、単独では悲嘆と関わりのない語であっても、「山彦の答ばかりは答へなん。ききて慰むことやある」「むなしき空と知りながら、なに頼みつ、」(『平仲物語』三段長歌)のように、追慕、恋慕を表現するために用いている場合が多い。

これは貞文の現存歌一一四首の内、九〇首が、恋の話題を多く採っている『平仲物語』に依拠し、故に現存歌中、恋歌は八〇首を占めること更にその内の七五首は贈答歌であるという事実に関わりがある。

恋の贈答歌においては、贈歌は大仰な失意、悲嘆の心を詠んでみせ、

返歌は贈歌における用語を借りて、贈歌の心からつかず離れずかつ、贈歌よりも強い表現で切り返すことが常套であったから、表面的には悲嘆、追慕の歌が多くなる。(例えば、『平仲物語』十一段、我のみや―富士の嶺の―神よりも―かれぬ身を、の―一連の贈答歌や、『後撰集』六五八―六五九等)

しかし、これらの貞文の歌を悲嘆、失意の歌とよべるかというところではない。どのように大仰に悲嘆や、失望、追慕を表す語句を用いても、歌の心は決して深刻な悲嘆を詠んだものではない。『後撰集』六首の中で、真に悲痛な追慕の心を詠んだ歌は一首(七一〇)のみである。貞文の歌には、恋歌以外にも人生における悲痛な深い嘆きを訴えている歌がある。(『古今集』九六四、九六五、『拾遺集』一三〇八等)しかし、現存歌の多くを占める恋歌の中には、そのほとんどが『平仲物語』に描かれているような日常のすさびの中(2)から生まれたものであるだけに、悲嘆、失意を詠んだ歌は割合にするとむしろ少ないのではないか。

二

一方、友則、深養父の恋歌を見てみる。『古今集』及び『後撰集』の友則、深養父の恋歌における主要用語を見る。

友則歌について、形容詞等は、傷し、悲し、つれなし、恋し、憂し、苦し、空し、うすし、動詞は、迷ふ、怨む、忍びかぬ、恋ひ死ぬ、いとふ、色に出づ、空になる等、名詞は、泡、恋、心、命、あだ物等、悲嘆を表す語が多い。また、深養父歌も、わりなし、恋し、空し、泣く、恋ひ死ぬ、死ぬ、涙、命、心等、悲痛を訴えることがが多い。貞文歌と比較すると、動詞は恋ひ死ぬ、死ぬ等、むしろ、友則、深養父の歌の方に、悲嘆、失望、追慕を表す強い調子のことばが使われている。

結局、貞文歌のみに悲嘆の歌が多いとはいえず、大仰な悲嘆表現の恋歌は貞文一人の特質とはいえないのである。このように、用語の面だけでは、三者三様の悲嘆の詠みぶりの実質は鮮明ではない。そこで、友則と深養父の恋歌の特徴を見てみる。

田中新一氏は、深養父の歌について、

抒情中心ではなくて理知中心の恋歌で平叙文的な散文表現を導入し、詞より心の機知的趣向をねらった恋歌が目立つ。³⁾

として、『古今集』六〇三、六一三、六九八を例歌として挙げておられる。左にその三首を掲げた。

六〇三 こひしなばたが名はたたじ世中のつねなき物といひはなすとも (恋二)

六一三 今ははやこひしなましをあひ見むとたのめし事ぞいのちなりけり (恋二)

六九八 こひしとはたがなづけけむことならむしぬとそただにいふべかりける (恋四)

なるほど、恋ひ死ぬ、死ぬと激しい悲嘆の語を使っているが、これらは理屈で詠んだ歌である。例えば六〇三は、「あなたに恋いこがれて私が死んだら、あなた以外の誰の名も立たないだろう。人の命は無常なものだとあなたが言いなしたって(あなただっただけには済みますまいよ)。」と脅迫の口調である。六九八は、「恋しいとは誰が名づけたことだろうか。たゞ死ぬとだけ言うべきである。」と理屈っぽい言い方で、優しい抒情は感じられない。

次に友則の恋歌の特徴を知るために、友則の恋歌がどのような場で詠まれたかを見てみよう。友則の『古今集』入集恋歌は、五六一―五六五、五九三―五九六、六〇七、六一五、六六一、六六七、六六八、六八四、

七一五、七五三、七八七、七九二、八二七の二〇首である。この内、五六一〜五六三、五六五、六六一、七一五は班子女王歌合に出詠された歌で、そこでは五六一〜五六二は「夏」、五六三は「冬」、五六五及び六六一は「恋」、七一五は「夏」の題詠とされ、五六五及び六六一以外は恋歌とはされていないのである。

もともと四季詠であった歌が『古今集』では恋歌とされているのである。即ち撰者が優れた恋歌として採録した歌の中には、四季詠をも含む題詠や観念詠が相当に入っているわけである。左記は友則の恋歌の一部であるが、ゆつたりとした美しい叙景の比喻の中に溶けこむ、四季歌と紛うような詠みぶりである。

五六一 よひのまもはかなく見ゆる夏虫に迷ひまされるこひもするかな

(恋二)

五六三 ささのはにおく霜よりもひとりぬるわが衣手やさえまさりける

(恋二)

六八四 春霞たなびく山のさくら花見れどもあかぬ君にもあるかな

(恋四)

七一五 蟬のこゑきけばかなしな夏衣うすくや人のならむと思へば

(恋四)

七五三 雲もなくなぎたるあさの我なれやいとほれてのみ世をばへぬら

(恋五)

このような恋歌を買えら撰者は理想としたのである。実際の場に即した実詠の恋歌ではなく、このような恋歌の中に「普遍的な恋歌」を求めていたことがわかるのである。

これに関連して、菊地靖彦氏は『古今集』の恋歌を、

I 卷一、二 恋愛前期の歌(未達恋)

一四七首

II 卷三、四(七〇一番まで) 恋愛成就期の歌(達恋)

八六首

III 卷四(七〇二番〜)、五 恋愛後期の歌(達不達恋) 一二七首
に分類され、卷一、二の「未達恋」の歌は、観念詠が多く、また、撰者の歌が多いとしておられる。⁴⁾

その観点から、友則、深養父の恋歌を見ると、前者は二〇首中一一首がI、四首がII、残り五首がIIIに入る。後者は七首中四首がI、残り三首がIIである。即ち、友則歌も深養父歌も、恋歌といっても観念詠が多く、観念としての「未達恋」に適合していることを示している。

また、友則は『古今集』の筆頭ないしは筆頭的地位の撰者として、その歌は『古今集』の恋歌の歌風の代表の一つとして採歌されているわけである。その歌風とは、おどかな叙景の中で人事と自然を融合させて、自然を比喻として人事を詠い、人事を比喻として自然を詠うような詠みぶりである。

三

先にも述べたように、貞文の恋歌はそのほとんどが贈答歌における実詠である。先に掲げた『後撰集』入集恋歌のように、贈歌の相手が判明している場合も多く、詠んだ契機は実際の場に即している。『後撰集』恋歌部には、このような詠歌事情を示す詞書が付され、その詞書が歌をより現実感のあるものにしていく。『後撰集』のこの姿勢は、貞文歌に限らず、友則歌(六〇三、七九八、七九九)、深養父歌(八九六)に関しても同じである。それは『古今集』のように歌合歌や屏風歌という公的な事情を述べたものではなく、全て個人的な作歌事情を述べたものである。貞文家歌合歌(一〇一二)のように歌合で詠まれた歌も、男女の仲らいいにおいて詠まれた歌としてふさわしいような詞書が付されている。

『後撰集』は、恋歌一首の成立の背景に、男女の仲らいの物語的事情、言い換えれば題詠ではないという意味での現実性を求めたということであろう。

他方、『古今集』に入集している貞文の恋歌三首の内二首は、『平仲物語』九、十八段により、六六六は贈歌の相手が閑院の御、八二三はある上達部女であることがわかっているが、二首とも個人的な作歌事情を示す詞書はない。

表IIは、『古今集』及び『後撰集』恋部における「題しらず」と、作歌事情を示す詞書のある歌の比率である。題しらずであってもその歌に対する返歌があり、作者明記の歌は、状況がわかる歌として、詞書のある歌に含めた。『古今集』の詞書を付した歌の内、二二首は公的な歌合歌や屏風歌である。

表II

『古今集』 (恋三六〇首)	題しらず	三〇二首	八三・九%
	詞書あり (内、私的な場 を示す詞書)	五八首	一六・一%
『後撰集』 (恋五六八首)	題しらず	七三首	一二・九%
	詞書あり	四九五首	八七・一%

これを見ると、『古今集』では作歌事情といっても公詠歌が多く、私的な恋の場における実詠であることを記している歌は恋歌全体の一〇％である。その内の多くは業平の歌であり、他の作者の作歌事情にはほとんど関心を示していない。歌の成立事情がどのようなものであっても、歌のみで完結性をもち、普遍性をもっていることを求めたということであろう。それに公詠歌が多いことは、題詠、観念詠が多いことにもつながる。

一方、この表から、『後撰集』は歌の生まれた私的な場と状況に多大の関心を示し、たとえ、それが時には『後撰集』の創作であっても(例えば九六七・九六八)その歌が生まれた場を私的な場として再現することに意を用いたことがわかる。

福嶋昭治氏はこの点に関して、次のように述べておられる。

『後撰集』はいはば「歌のための歌」を避け、具体的な日常の人間関係の中で詠み交わされる「生活に生きている歌」に興味を持っていたということではなからうか。具体的な生活での詠歌を、作歌の場を問題にする以上は、状況から切り離された題詠歌には大きな関心を持つことはしない。(中略)「誰が、いかなる場で」という点も、同時に大きな関心事になってくる。⁵⁾

先に掲げた貞文の『後撰集』七一〇番歌を見ると、今まで述べてきた『後撰集』の特性を最もよく表していることがわかる。

強大な時平の権力によって盗まれてしまった恋人に、文を贈る手段もなくし、子供の腕に書きつけた恋文であるという詠歌事情を語る長大な詞書と返歌を伴って、読む者には実詠としての状況がよくわかる。それにより一層現実実感が増し、歌の効果が増幅されることになる。

今、『古今集』と『後撰集』の恋歌の贈答歌に対する扱ひ方の違いを見てみよう。

『後撰集』では、紀乳母と貞文の贈答歌が五三〇・五三一、六四七・六四八と二組採歌されているが、『古今集』誹諧部には、貞文と贈答した紀乳母の貞文への返歌のみが題しらずとして採られている(一〇二八)。しかし、『古今集』的な採録をすると実際の詠歌事情はわからず、贈答歌本来の機微は伝わらない。『平仲物語』十一段に載っている二人の唱和を見ると、もともとは左記の形であったと思われる。

A 我のみやもえてかへらむよと、もに思ひもならぬふじのねのこと
貞文
『後撰集』六四七)

B ふじのねのならぬおもひもえはもえ神だに消たぬ空しけぶりを
紀乳母

(『古今集』一〇二八)
貞文

C 神よりも君は消たなれたれによりなままし身の燃ゆるおもひぞ
紀乳母

D かれぬ身を燃ゆときくともいかゞせむけちこそしらねみづならぬ身
は

『古今集』的な採録においては、作歌の事情、場がわからないため、贈答歌のみがもつ歌のやり取り、かけ引きの面白さは失われてしまう。

貞文のA、Cも悲嘆、失意の表現は大袈裟ではあつても、深い悲しみを詠んだものではなく、機知やユーモアに富み、むしろ二人で唱和を楽しんでることが、贈答歌の体裁であればそのまま伝わってくる。実詠の場における状況がそのまま伝わってくるような歌及び採録のしかたを『後撰集』は好んだといえよう。

『後撰集』の恋歌撰集の一つの方針は、会話代わり、談話代わりとなるような贈答歌の機微をそのまま伝え、贈答歌のあるべき姿を示すことにあつたといえよう。

貞文も『古今集』歌人ではあるが、他の『古今集』歌人と違う点は、貞文の恋歌は『後撰集』でこそその価値を認められ、本領を発揮したところなのである。

その傍証として、『古今集』恋歌部において有力であつた友則や深養

父の恋歌が『後撰集』では表Iに示すように、友則三首、深養父一首と激減している事実が挙げられる。それに反し、貞文の恋歌は六首と増している。

友則や深養父のような歌風の恋歌は、『後撰集』ではほとんど評価されなかつたと言えるであろう。結局、恋の悲痛な思いを述べるにせよ、恋のかけ引きの機微を詠むにせよ、貞文の恋歌のような歌(日常的、実詠的、贈答歌としての面白味を備えている)こそが『後撰集』では歓迎されたということなのである。

これは、『古今集』及び『後撰集』における恋歌に対する扱い方の相違ということとは別に、貞文の恋歌が、先に述べたような『後撰集』的特質の一面を備えているということである。四條教長が「貞文の恋歌(七一〇番歌)は『後撰集』恋歌のまなこ」と評したのもさこそと理解できるのである。

四

次に貞文の歌を、その表現や修辞の面から見てみる。ここでは恋歌に限らず、その他の歌についても考察してみたい。

先に掲げた『後撰集』七一〇番歌について見ると、その表現は、友則の恋歌のようにゆったりとした叙景を比喩とした恋の心を詠ったり、深養父の恋歌のように、理知や理屈で詠んだものではない。即ち、観念的ではない。「ゆく末永く共に」と約束した貞文と棟梁女の、恋の破綻の悲しみを、初句から末句までストレートに表現して、叙情的な優しい調べの歌である。『大和物語』百二十四段に見える

ゆくすゑの宿世も知らず我がむかし契りしことはおもほゆや君も、同じ頃、同じ女性に贈った歌である。この歌や、先に掲げた『古今

集』六七〇も「涙せきあへずもらしつるかな」のところに柔媚で繊細な調べが表現されている。『古今集』の

九六五 有りはてぬいのちまつまのほどばかりうきことしげくおもはず
もがな

は、『古今和歌集両度聞書』によって、「心、誠に哀にたくひなくや。一切の人思ふべき理也」、『古今栄雅抄』でも「常に詠吟すべき歌なり」と評された歌であるが、解官された折の閉ざされた憂愁の心情や、人生の苦悩を詠んだ抒情の溢れる歌である。貞文の歌は理屈っぽくない。抒情的なのである。

次に他の歌人の修辭法に比較して目立つ点は、貞文は疊句法や同音反復を多く用いていることである。

- ① なみだの川となりぬればながれてのみぞ
- ② 冬の夜毎に置く霜のおきゐて常に
- ③ 山彦の答へばかりは答へなん
- ④ むなしき空をながめつゝむなしき空と知りながら
- ⑤ 木網付鳥の夕なきを
- ⑥ 絶えてあはずばわたりがはとくとだにわたりてしがな
(以上、『平仲物語』三段・長歌より)
- ⑦ 山の山昔やまず悲しき
(『同』三段・返歌より)
- ⑧ あづま野の東屋に住むもののふや
(『同』二十八段)
- ⑨ みるめなみ立ちやかへらむあふみちは名のみうみなるうらとらみ
て
(『同』二十四段)
- ⑩ 秋風の吹きうらがへすくすのはのうらみても猶うらめしきかな
(『古今集』八二三)
- ⑪ 緑にはえるさねかつら我が君さねと
(『大和物語』百二十四段)

同音反復の中には、①、②、⑤、⑦のように頭韻を踏んだもの、③、

④のように語義も同じで疊語をなすもの、⑥、⑧、⑨のように同音異義語だが連想を喚起させるもの等とあるが、多くの場合、一首の中でそれらの修辭が組み合わさり、使用されている。⑩のように、一首中に「み」の音が六回も使用されている歌もある。三十一音の中に「み」音を六回、「う」音を三回疊みかけて用いることにより、吟じるに軽快な韻律をもつ歌となっている。⑪は風に吹かれてよく裏返る葛の葉の裏見を恨みによせて、三回も「うら」を繰り返すことにより、一首の調べを軽快にリズムカルにすることに努力している。このように貞文は、自分の心や感情を訴えるのに同じ語句や音を重ね、疊みかけて、なだらかな調べに整えて詠む方法を意識的に積極的に採用した。

また、用語の用い方について、萩谷朴氏は

二、三の例外を除いて本歌取りの模倣作品が少なく、その用語にも独特なものが多いやうである。

と述べておられる。

この点について見ると、例えば『古今集』六七〇「枕より」は『同』五〇四「わがこひを人しるらめや敷妙の枕のみこそしらばしるらめを本歌取りにしている。しかし、こういう本歌取りはむしろ少なく、ユニークな用語使いが目立つ。『古今集』の

九六四 うき世にはかどせせりとも見えなくになどかわが身のいでがて
にする

を例にして考えると、『古今和歌集両度聞書』で「心哀に言葉つかひ又めづらしくや。返々一、二句あたらしき物也。」と評しているように、用語の用い方が斬新である。菊地靖彦氏もこの点に言及して、この歌が『拾遺集』に重出していることについて、

『古今集』では上句の言いまわしそのものが珍重されて採録された¹⁾と述べておられる。

同じように『古今集』

一〇三三 春の野のしげき草ばのつまこひにとびたつきじのほろるとそなく

も、当時の擬音、擬態語である「ほろろ」を大胆に詠み込んで、雅と俗との調和を目指している。

もう一例、『古今集』八二三「秋風の」も、頭昭が

此歌を本にて、くずのはのかへるうらみなどはよむなり¹⁰⁾と述べたように、その独自の表現が後世多くの類歌を生んだ。

次に貞文の歌のもう一つの特質として、地名を多く詠み込んでいる点が挙げられる。表Ⅲは貞文の現存歌に見える地名である。

童田川	一	木枯の森	二
逢坂の関(逢坂も。)	三	きのせ川	一
長良山	一	白河	一
難波瀧(難波江も。)	二	富士の嶺	二
あづま	一	近江(近江路も。)	四
勿来関	一	妹背山	一
名取川	一	糺森	一
天の川原(天の川も。)	二	奈良	一
長洲浜	一	猿沢池	一
初瀬川	一	津の国	一
檜の隈川	一	堀江	一
いなり山	一	清滝	一

現存一四首中、二四箇所三三の地名が詠み込まれている。三、四首に

一回の割合で頻度が高い。その地名は、勿来関、名取川、木枯の森、富士の嶺以外は、逍遙好きの貞文が実際に逍遙できる範囲である。曾田文雄氏は、東国の地名が多い点に関して

平中という人物の任官に縁あつての故らしく思われる。平中は、延喜十年正月参河介に就任し、延長元年六月にも参河権介を兼ねていたことがあつた為に——この場合、平中は守ではなく介なのだから、遷任といふことはなかつたらう——参河国を含む東国へは幾度か赴いたことがあつたに違いない。

このように貞文は、地名を詠み込む場合も、多くの場合は観念詠でなく、実際その土地を知つていて景物を詠み込んだと考えられる。

おわりに

平貞文の歌の特質を探るために、以上、さまざまな角度から、貞文の歌の特徴について考察してきた。その結果、貞文の恋歌の本領は、日常の贈答歌の中に発揮されていることがわかった。それは後撰集時代に重なる性質をもつたもので、『後撰集』の出現があつて初めて評価されたものである。貞文のそのような作品の価値は、貫之ら『古今集』の撰者が全く見出し得なかつたもので、後に『後撰集』を始め、『大和物語』や『源氏物語』に影響を与えていくのである。

貞文の歌は悲嘆を詠んだ歌が多いと言われるが、恋歌は必ずしも悲嘆を詠んだものではなく、大仰な悲嘆ぶりの中に、贈答歌としての機微や機知がしめされている。『後撰集』七一〇のような悲痛な追慕の恋歌はむしろ少ない。しかし、恋歌以外の、秋の歌や哀傷や人事をふくめた雑の歌に、人生における挫折や失意を詠んだ歌々があり、それらの中に悲

しみや寂しさの真髓が詠まれているといえる。

貞文の現存歌には、秋以外の四季の叙景歌が少なく、また、その勅撰集入集も少ない。但し、秋歌のみは、勅撰集入集歌二六首中六首を占め、秋歌の多さが目立つ。それら秋歌の中には、応召歌（『古今集』二七九）歌合歌（『新拾遺集』一六三三）も含まれ、日常生活の中から詠みおこす歌とは趣を異にしている。

貞文も宇多帝（院）の下で多くの歌合に参加したことが記録に残っていたり、推定されるけれども、しかし、このような秋歌以外勅撰集に採られた他の歌はほとんどが公詠の歌ではなく、恋歌をも含めた人事の歌や雑の歌であり、日常生活の中で嘆きを吐露した歌々である。

総括すると、貞文は公詠の四季の叙景歌が少なく、恋歌にしても雑歌にしても、日常性の中から歌を詠むことに得意であること、すさびで詠んだ恋歌の数々は『古今集』的特質よりも『後撰集』的特質を備えていることが、古今集時代、在世歌人として三代半ばで九首も入集させているにもかかわらず、古今歌風の主流ではなかったことの因と言えらるであろう。

〔注〕

- (1) 萩谷朴『平中物語・貞文全集』二五九、二六二ページ。
- (2) 平貞文のすさびの恋については、目加田さくを『平仲物語論』一八三ページに詳しい。
- (3) 田中新一「清少納言の三代集意識」小沢正夫編『三代集の研究』所収三四ページ。
- (4) 菊地靖彦『古今的世界の研究』一六一ページ。
- (5) 福嶋昭治「後撰集ノート——その本性を求めて——」『岡田学園女子大学論文集一五』（一九八〇）四九ページ。
- (6) 四條教長『古今集註』に次のようにある。

カキクラス心ノ闇ニ迷ヒニキ夢ウツツトハ世人サダメヨ

古今ノ恋歌ノナカニハ、コレヲ規模ノコトニスルナリ。後撰ニ定文ガワガカネゴトノ、トヨメル、コレナム両集ノ恋歌ノマナコナリケル。歌モイミジク、コトザマシニ、アサマシキユヘナリ。

(7) 与謝野寛他編『日本古典全集』所収七二、七三ページ。

『平仲物語』十八段では「あきかぜのうち吹きかへす」となっており、目加田さくを氏はあきかぜにうら吹きかへすと頭韻をふんでいたのが、「ち」に誤ったものかもしれないと述べておられる。

(8) 萩谷朴『平中物語・貞文全集』二六二ページ。

(9) 菊地靖彦『古今的世界の研究』四四五ページ。

(10) 藤原顕昭『古今集註』

(11) 貞文の逍遙を題材にした話は、『平仲物語』一、六、九、二十五、三十五段に見える。

(12) 曾田文雄『平中物語・研究と索引』一七ページ。

(13) 「仁和四年——寛平三年秋内裏菊合」「某年秋朱雀院女郎花合」「某年大井川御幸」「某年宇多院物名歌合」「延喜五年四月二十八日右兵衛少尉貞文歌合」「同六年右兵衛少尉貞文歌合」「某年貞文歌合」等。

〔付記〕 小稿は、平成八年一月提出の修士論文の一部を再考したものです。

（かなざわ あけみ クイーンズランド工科大学非常勤講師）